

韓統連大阪通信紙

自主

チャジュ

334号

2018年12月号

자주

発行 在日韓国民主統一連合
(韓統連) 大阪本部

〒544-0034

大阪市生野区桃谷3-13-6

TEL06-6711-6377 FAX06-6711-6378

毎月1日発行 購読料 年間3000円

郵便振替 00940-7-314392

民族時報社 大阪支社

韓国批判の非常識と民主主義の危機

今、日本は韓国批判一色だ。「嫌韓」の影響で平昌オリンピックや朝鮮半島の南北の和解の動きに関しても冷淡な日本の世論ではあったが、10月30日の韓国大法院（最高裁）の元徴用工判決を契機に一気にヒートアップしている。「すべて韓日条約で解決済み」「国と国との約束を守らないのは国際ルール違反」など、連日、マスコミは日本政府と同じ主張を繰り返し、韓国政府を一方向的に批判している。冷静に問題を解決しようという議論がまったく見られない異常事態だ。

●ありえない安倍首相発言

新しい政権が過去の国家間の合意を変更することは十分に想定されることであり、異常なことではない。アメリカはトランプ政権になりTPP離脱を表明

したが、関係国から「離脱は賢明な策ではない」という議論はあっても「一度約束した事を破るのはルール違反」という批判はない。EUからの離脱を決定した英国に対しても「EUから離脱するのは賢明ではない」という議論はあっても、「一旦結んだ条約から離脱するのはけしからん」と非難する声はない。

韓日協定で消滅したのは国家の外交的保護権であり、個人請求権ではない。徴用工（強制徴用被害者）問題の本質は人権問題であり、「被害者が受け入れられない国家間の合意は真の解決にはならない」というのが国際的常識であり、韓国大法院判決は「国際法に照らしてありえない批判」と豪語する安倍首相の発言自体が、ありえない話なのである。

●他国の司法を批判する非常識と異常

韓国政府の対応は「韓国は法治国家であり、司法の判断を尊重し、今後慎重に検討する」という冷静なものだ。しかし、日本政府は判決が出るや否や韓国政府に是正を求め、駐日韓国大使を呼び出して厳しく抗議した。比較的良心的とされる某大手新聞の解説には「判決は予想されていたのに、韓国政府が事前に対策をとってこなかったのは問題意識が乏しかったのではないか」とまで述べている。大新聞が他国の政府に司法介入すべきだったと主張するのは内政干渉であり三権分立を否定するものであり、日本の民主主義の危機の象徴と言えよう。

今回の事態の背景には日本の右傾化、歴史修正主義がある。過去の植民地支配を反省するどころか、

その事実すら認めようとしぬ異常な状況。安倍首相は最近、朝日交渉に前向きな発言をしているが、北朝鮮の宋日昊（ソ・イルホ）日朝交渉担当大使は、11月にピョンヤン市内で日本人記者に次のように語っている。「日本は韓国と国交を正常化して50年以上も経つのに、いまだに両国関係は良くなっていない。それは人民の心に残るわだかまりを、解消しなかったからだ。もし日本が、われわれと国交を結ぶなら、過去の植民地支配への謝罪と賠償をするべきだ。但し、金額が問題ではない。わが人民が日本からのお詫びに真心がこもっていると納得すればお金などいらない」。

さて、安倍首相はどう回答するのだろうか。

(隆)



▲韓国大法院で賠償判決を勝ち取った元徴用工被害者

平和・統一フェスタ2018 アンサンブルに参加して

10月28日「平和・統一フェスタ2018」が開かれました。フェスタではアンサンブルが披露され、参加者の皆さんに大きな感動を与えました。今号ではアンサンブルの出演者から感想文を書いて頂きましたので掲載します。

世代をつないで、時代の扉を共に開こう ～アンサンブルに出演して～ 永久のり子

「平和と統一の新しい時代を私たちの手で」。わたしはこの「私たち」のなかに、日本人である自分を含めることに長い間ちゅうちょしてきた。日本が朝鮮を植民地にしてきた歴史に初めて触れたのは10代前半だったと思うが、そこから知れば知るほど、あるいは韓統連を通して闘う韓国の人びとに出会えば出会うほど、そのちゅうちょはより強くなった。そして歴史に学ぶことも、真の謝罪も進まない日本と、そのあり様を変える力になり得ていない自分自身が追い打ちをかけて、内向きになりがちだったわたしの目の前で朝鮮半島の歴史が大きく、力強く動き始めたのが今年の年明けだった。

その歴史のうねりを、さらに大きくするために企画された今回のフェスタ。アンサンブルのメンバーに今回も声をかけて頂いた。これまでの蓄積は多いが「新しい時代」を展望するために、私は韓青の青年たちと協同し、新たなスタイルを模索することを願い出た。

本番までの時間は必ずしも長くはなかったが、一緒に歌い、セリフのひとつひとつ、映す写真の一枚一枚について意見を出し合い、一緒に食べて、語り合うなかで、青年たちがどんどん「自分らしく」光を放っていく様子を間近に見た。当日の舞台での姿は、その集大成として最高に輝いていたが、わたしはそこに至るプロセスにこそ、闘いの歴史の継承を熱く体感した。「大した活動もできていない自分が、韓国の闘う人びとの歌を歌えるのか」と自問したこともあったが、そのわたしが、ここに一緒に立っていることに意味がある。そう

自信をもって舞台を終えた。

「あなたは韓青の青年たちにとっての先輩（ソッベ）だ」と言ってもらえたことが、わたしの何よりの宝になった。日本人として、彼・彼女らの先輩であるなら、そんな誇らしいことはないと思っている。

想いを伝えるには

高愛子(コ・エジャ)

今回、平和・統一フェスタでアンサンブルに出演できたことは、私の今後の韓青活動においても、とても大きな糧になりました。

ナビゲーターという大役を頂き、当初の練習ではただ上手に読み、演じる事に徹していましたが、「それでは観客に私たちの思いが伝わらない」と指摘を受けたことで、改めて朝鮮半島情勢が平和と統一に向けてダイナミ

ックに前進しているんだということを考えました。

朝鮮戦争、離散家族、分断の悲惨さや、独裁政権下で多くの民主化を願う市民たちが血を流して闘って来た歴史。決して忘れてはいけない史実が私たちには多くあります。

ナビゲーターをするにあたり、この想いを当初は自分のものにできていなくて、なかなかセリフも思うように覚えられず、感情を込めることもできませんでした。しかし、何度も台本を読み深め「この時、ここで闘って来た人たちは、どんな想いでいたのだろうか」「韓青で活動している私は、何を観客に伝えるべきなのだろうか」と考えていくと、自分でも驚くほど気持ちを入れることができ、辛い歴史、決して忘れてはいけない歴史、そして、これから平和と統一への新しい時代の渦中に私たちがいる。この想いを自分の中に落とし込



▲平和・統一フェスタ2018で発表したアンサンブル

むことができました。

見に来て頂いた方々に心からの想いを伝えるには、自分の心からの想いを伝えてこそ、初めて伝わるのだと身をもって感じることができました。

これから平和と統一の新しい時代を築いていく立役者の中に韓青もいます。今回のアンサンブルで得た正しい歴史を知る大切さ、想いを伝えることの大切さを決して忘れることなく、今後も精一杯邁進していきたいと思えます。

アンサンブルを終えて

朴槿洙(パク・クンス)

「韓青のピンチヒッター」を自称する僕は頼まれごとに、へえへえと安請負してしまうことが多々あります。今回、アンサンブルのお話を頂いた際も軽い気持ちで会合の場へ向かったのですが、詰め詰めの練習日程と完成形に至る道程を示された瞬間に、時間を巻き戻したくなったというのが当初の正直な感想です。

何せ生来怠け者であり、規律ある練習というものが大嫌いな僕ですから、他人の歌をフルコーラスで延々と繰り返し歌ったり、恥ずかしさで身がよじれそうになりながら、皆の息に合わせて歌ったりというのは、ほとんど苦行に近いものでした。

しかし、他方で練習後の反省会と称した飲み会にて(ほとんどタダ酒。これは若造の特権です)を飲んだり、軽くなった口でつぶやいたアイデアが受け入れられたり、諸先輩方からいろいろな話を聞いたり、本番までの期間は楽しい時間であったことも事実です。

今回のアンサンブルは、陰惨たる韓国近現代史の暗鬱さに五寸釘を打ち込むような従前の重厚なアンサンブルを継承しながらも、統一新時代を迎えた今に相応しい春風のようなフレッシュな作品に仕上がったのではないのでしょうか? どうだったのでしょうか?

統一運動の主軸を担うのは在日朝鮮人であるように、統一祖国の中心は我々でなければなりません。我々の発信力や影響力は微々たるものかもしれませんが、少なくとも今流行りの韓国のアイドル歌手がやってる炎上商法まがいのパチモンではなく、今回のアンサンブルは民族として歴史的価値を問う芸術表現であったと自負しています。

フェスタを通じて学べたこと

金和容(キム・ファヨン)

私が出演者としてアンサンブルに参加したきっかけは、趙暎和(チョ・ヨンファ)韓青大阪府本部委員長から「アンサンブルに出演できるか?」と聞かれた時でした。とりあえず、やってみようと思いましたが、韓青以外のメンバーの方々と練習するので正直緊張もしました。

週1~2回のペースで練習を行い、本番前はリハーサルもしていきました。私はウリマル(母国語)で歌を歌ったことがなかったので不安でしたが、音程やリズム感、読み方を覚えていくうちに歌えるようになりました。

歌を指導する永久のり子さんをはじめ他のメンバーの方々にしっかり教えて頂き練習を重ねてきたので、本番では心を込めて全身全霊を出して歌えることができました。

アンサンブルの練習を通じて多くのことを学びました。北朝鮮の現在の様子や韓国で起こった民衆運動やデモ、そして今、南北が和解の道へ進んでいることも知り、充実した時間を過ごすことができました。練習後の反省会では互いに意見を出し合ったり、私もアンサンブル以外で分からないことがあれば質問したり、普段とは違うコミュニケーションもとれて良かったです。

本番で歌を歌っている時は、それぞれの歌詞の意味を理解して歌うことを心がけました。「君のための行進曲」の場合は民主化のために闘い、亡くなった人々に敬意を込めて力強く歌いました。

「京義線に乗って」は統一への願いを込めた歌なので、未来に向かって進んでいきたい思いで明るく歌い、そして「ホルロ アリラン」は旋律が美しく、清らかに感じとったので、丁寧に歌うようにしました。

アンサンブルに参加して、出演者だけでなく、観客と一体になれたと強く感じました。在日同胞だけでなく、日本人やそれ以外の国の人たちにも朝鮮半島の平和と統一を応援して頂ければ大変嬉しく思います。

このような機会があれば、また参加したいと思えますし、皆が差別のない平和な世の中になってほしいということ、私は強く願っているんだなと改めて感じました。出演者の方々やフェスタに参加して頂いた皆様に心から感謝いたします。

チンチャコリアツアー—感想文

11月11日～13日まで国際女性年大阪連絡会の皆さんが、「チンチャコリア（本当の韓国）ツアー」に参加しました。今号では、ツアーに参加した2名の方に感想文を書いて頂きましたので掲載します。

初めて聞き、触れた体験でした

田島茂恵

今年9月に行ったK-Pop大好きな13歳の姪との初韓国旅行と『はらっぱ（子ども情報センター機関紙）』の「北朝鮮」の特集、金昌五さんの原稿を読んだことがきっかけで、チンチャコリアに興味を持ち、友人と参加しました。

日帝植民地時代、軍事独裁政権、拷問、独立運動、キャンドルデモ。ほとんど全てが初めて聞き、触れた体験でした。

参加して本当によかったと感じることは笑顔で暖かく、優しい空気感の中で真剣に説明して下さった韓国の皆さんに出会えたこと。西大門刑務所記念館等を案内して下さった自分自身も拷問経験を持つリュウさん。「日本人が嫌いじゃないですか」と聞くと「難しい問題だ。でもフェイス・トゥ・フェイス、こうやって仲良くなること、知り合うことが大切なんじゃないか。「チング、友だち」と言いました。この旅で一番印象的だった言葉です。

帰国してから旅を振り返り、改めてチンチャ（本当）の意味を考えています。旅の中でも何度か日本は国として謝罪するべきという話題がありましたが、謝罪とは何をもって謝罪か、いつまで謝罪するのかなど疑問も湧いてきて、自分の考えがまとまりません。

ではどうするのか。疑問もあるからこそ今回の旅をきっかけに「考えてみる。話してみる。自分と違っていても聞いてみる」を身近な人たちと積み重ねていこうと思っています。

結局「国と国との関係を創っていくのは、私たちひとりひとりなんだ」ということを考えるきっかけとなったチンチャコリアの旅。人生における大切な出会いに心から感謝しています。



▲オドゥサン統一展望台で北の地を背景に
前列右端が久保さん、後列左から2人目が田嶋さん

チンチャコリアツアーを終えて

久保有美

私にとって初めての韓国来訪は、記憶に残るデビューでハートフルな3日間でした。そもそも私が韓国に興味を持ったのは、K-Pop好きの娘によるもの。娘が大好きな韓国とは一体どんな国なの？というのがツアーへの参加動機だったので。

韓国。改めて考えてみると海を隔ててすぐのとても近い国。相互に何やらもめているようだが一体どうしてなのか？ツアーに参加した初日から私は衝撃を受けました。日本が行なってきたこと、近代韓国に起こった改革。学生時代、近代史をすっ飛ばしてきてしまった無知な私にとって、初めて知る現実がそこにありました。

つい最近、キャンドル革命という世界でも類を見ない平和的で大規模なデモがあったのに、私はどうして知らなかったのでしょうか。報道の少なさから知り得なかったという現実もあります。しかし、隣国のことに自身が無関心であったことが一番の原因だったのでは？無関心で知識がないため、偏った情報に流されがち。そんな私のような人間が日本人の多数を占めているのが現実なのです。大切なのは互いに理解しようと求め合うこと。今回の旅で現地の方々と交流できたことは何よりの喜びです。実際に見て会って知ることが、理由のない偏見の終息に繋がるのではないかと。私がすべきことは今回の旅で見聞きし感じたことを広めていくことだと思うのです。K-Pop好きから始まり、今、韓国大好きな娘には私が知った本当の韓国を、余さず伝えたい。次世代の若者達が両国の架け橋になってくれますように。

日本社会の中で「民族とは何か」 「民族的に生きる」ことについて討論する 韓統連生野支部学習会

故金政夫(キム・ジョンブ) 所長(韓統連前議長)の著書『歴史の意志を实践する(増補版)』を用いた連続学習会の3回目は、金隆司韓統連大阪代表委員を講師に招いて「民族的に生きる―構造と本質―」という副題をもって11月18日(月)、韓統連生野支部で開かれた。



▲「民族的に生きる」について講演する金隆司代表委員

この度の一連の学習会を振り返ってみれば、そもそもは「日本の地にあっても民族史という大きな流れの中に存在する私たち 在日同胞が、いかにして人間らしく生きることができるのか」というテーマを解き明かす学習会であった。講師はそうした本論に立ち返るために、まず過去2回の学習会の要点をまとめたうえで「人間とは何か」「民族とは何か」「幸福とは何か」「主体性とは何か」など、本源的でかつ抽象的な問いかけを参加者に行いつつ、本書及び『愛国論』を随所に引用しながら、自ら投げかけた問いをひも解いていった。

講師の話を受けて行われた討論では、参加者たちがふだん考えていそうで考えていない講師からの問いかけに多少戸惑いながらも、話が進むにつれ発言者も多くなり、最後には普段以上に活発な討論へと発展していった。日本人の参加者たちも、自らの歴史に現在の自分を重ねながら発言する様相が見られた。

最終回にふさわしく、本書及び『愛国論』に込められたメッセージを自分たちの日々の生きざまにつなげていくうえで、非常に意義のある学習会

になった。

在日韓国人良心囚の 闘いの記録が出版される 『祖国が棄てた人びと』出版記念の集い

1970年～80年代、韓国に留学した在日韓国人が、朴正熙(パク・チョンヒ)をはじめとする独裁政権によって「北のスパイ」と事件をでっち上げられ投獄された。その在日韓国人良心囚の記録をまとめた著書『祖国が棄てた人びと―在日韓国人留学生スパイ事件の記録―』が日本で出版され、「出版記念の集い(主催:同実行委員会)」が11月24日(日)、PLP会館で開かれた。

集いでは、李哲(イ・チョル) 実行委員長の開会挨拶、韓国で在日韓国人良心囚の再審裁判を担当している弁護団などが紹介された後、記念講演1として、李錫兌(イ・ソクテ) 弁護士が講演を行った。李弁護士は、この本の内容について「在日韓国人青年たちの祖国に対する想いと不当拘束・拷問の実態、普通の日本人が必死に救援活動を行った記録だ」と述べ、「この本を出すことは、韓国社会で過去の歴史を忘れないためにも意義は大きい」と語った。



▲出版記念のつどいには多くの同胞、日本人が参加した

続いて記念講演2として、本の著者である金孝淳(キム・ヒョソン)氏が講演を行った。金氏は在日韓国人良心囚との出会いなどを語りながら、「この本を通じ、在日韓国人良心囚とその家族、救援活動をした人たちの闘いを知ってほしい」と語った。

講演終了後は同会館で交流会が開かれ、来日された弁護団を中心に親睦と交流を深め、終了した。

◆◆DVD紹介◆◆

＜平和・統一フェスタ2018＞

歌と映像でつづる平和と統一の新しい時代

アンサンブル「平和と統一の新しい時代を 私たちの手で」ライブDVD

1部:500円

「平和・統一フェスタ2018」(主催:同実行委員会)が2018年10月28日(日)にクレオ大阪東(大阪市城東区)で行われた。その第2部で上演されたアンサンブル「平和と統一の新しい時代を 私たちの手で」のライブDVDの紹介です。

アンサンブルの冒頭、平昌冬季オリンピックの南北合同入場行進から始まるハイライト映像が始まると会場は水を打ったように静まり返った。南北両首脳が板門店の軍事境界線で歴史的な握手を交わすところでは、さざ波のような拍手が起こった。

ナビゲーターの解説を軸に第3回南北首脳会談と史上初の朝米首脳会談に至る歴史的経過が歌と映像でつづられていく。光州民主化運動の映像やセウォル号犠牲者追悼式の映像、そして離散家族の再会の映像の場面では、会場のそここですすり泣く声が聞かれた。セウォル号遺族の闘いには共感の拍手が送られ、キャンドルデモの圧巻の映像には感嘆の声が上がった。統一



へと進む躍動感が「京義線(キョンイソ)に乗って」の歌とスライドショーで表現されると会場全体から手拍子が起こった。エンディングでは、朝鮮戦争から今日に至るまでの圧縮した歴史映像が壮大なBGMとともに上映され、大きな拍手の中で公演は終わった。

「感動しました」「何度も何度も涙がでました」「本当にありがとう」。多くの方々が感謝の言葉を残して会場を後にされた。ぜひともDVDにしてほしいとの要望を受けて今回の制作・販売となった。

制作にあたっては、当日の臨場感を大切にしながら映像資料は全画面にしてよりインパクトを強め、歌詞の日本語訳字幕もよりきめ細かく加えるなど、より深く内容が理解できるものとなった。

当日ご覧になった方は、あの感動をもう一度味わうために、当日ご覧になれなかった方は、あの感動を分かち合うために、ぜひともご覧ください。

(金五)

◆行事案内◆

連帯の夕べ

日 時: 2019年2月3日(日) 午後5時 受付 午後5時30分 開会

場 所: KCC会館(地下鉄今里駅下車徒歩10分)

大阪市生野区中川西2-6-10

内 容: 懇親会・文化発表・各団体からの報告・参加者からのスピーチ

参加費: 3000円

主 催: 韓統連大阪本部 TEL 06-6711-6377

編集後記

今号は、各行事の感想文を中心に掲載しました。どれも内容の濃い感想文でした。ありがとうございます。次号は2019年新年号です。お楽しみに。

(ソソ)

